

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第 2 期 7 号 — 通巻第 19 号 —)

Working Paper Series 2-7-9

2012 年 3 月 31 日

第II部：投稿—ワーキングペーパー—

書評 馬場宏二『宇野理論とアメリカ資本主義』
(お茶の水書房、2011 年 3 月)

戸塚茂雄

(青森大学教授 totsuka_at_aomori-u.ac.jp)

http://www.unotheory.org/news_II_7

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail:contact_at_unotheory.org

ホームページ <http://www.unotheory.org>.

書評 馬場宏二『宇野理論とアメリカ資本主義』 (お茶の水書房、2011年3月)

戸塚茂雄

【論文要旨】

馬場氏の『宇野理論とアメリカ資本主義』の書評である。氏の処女作『アメリカ農業問題の発生』から42年を経て現れた、今となっては最後の著書となってしまったが、その紹介と評価を述べたものである。精力的に研究活動を晩年にいたるまで行ってきた氏の畢生の名著といってもいい。ただスケッチだけに終わっている論点もあるが、我々後学のものが、宇野理論の発展・展開を考える場合の多くのヒントがみられる。

宇野経済政策論の組み換えが最大の論点であるが、その場合の論理が経済学原理論まで広げるとなるといまだ私にはイメージが具体的にわかなかった。段階論を拡充については、かなり説得的な見解を示しているが。

過剰富裕化論は、氏が晩年にかけて最も力を入れた主張であるが、より徹底してきたという感が深い。いずれにせよ問題提起の書である。

はじめに

「久しぶりに重量感のある本」(佐伯尚美『農林金融』第22巻第10号、1969年所収の書評)、「読ませる書物」(平井規之『大恐慌とアメリカ財政政策の展開』岩波書店、1988年、92ページ)と評価された処女作『アメリカ農業問題の発生』(東京大学出版会、1969年7月)以来42年を閲しているが、それ以上に重量感のある書が出版された。題して『宇野理論とアメリカ資本主義』という。物理的にも500ページを超え重量感があるが、内容はそれ以上である。

私は本書の表題の前半に関しては多少なりとも研究をしているが、後半のアメリカ資本主義に関

しては全くの素人である。従って前者を中心に見て行くしかないが、宇野理論を継承する氏独自の過剰富裕化論はアメリカ発である。私の関心はここでつながるから、アメリカ論にも多少は関係していることになる。

1つの章を除いて既発表の論文を集めて構成されたものであるが、全くそれを感じさせないのは、著者の力量のなせる技なのか。本書に収められた最近の論文は、出るとすぐ読むという状態にあったが、こうした構成の本になると、新たな読後感が生まれるものである。つまり首尾一貫した体系が見えてくるのである。叙述があたかも初めから計画していた如くに一貫しているのである。

第1部 宇野理論の歴史化

第1部は、第1章 宇野理論の「含蓄」、第2章 宇野社会科学論小史、第3章 宇野理論究極の効用、第4章 解説 段階論を巡る研究会記録、第5章 新資料との遭遇、第6章 宇野弘蔵と東畑精一、第7章 矢内原段階論と宇野段階論、第8章 『経済政策論』の成立からなり、宇野理論の生成過程の新事実の発見・推察を中心に宇野理論の改造に及ぶ論文で構成されている。

第1章の宇野弘蔵の文体論は、私が初めて著者の名前を知ったものである。私は当時経済学原理論、経済学史を学んでおり、応用経済学には疎い大学院生であった。宇野の文を解析し、含蓄があると喝破した文を読み、大変印象深かったという思い出がある。宇野の文体論は宇野理論史上初めてのものであろう。馬場氏の研究に再会するのはこのあと10数年ののちである。その間に私の恩師であり、馬場氏の研究仲間であった志村嘉一は早逝している。印象深い出だしである。この小論から始まるとは一瞬驚いたが、「宇野理論の歴史化」を心掛けた本書にはふさわしい章である。

第2章は、宇野弘蔵が、社会科学という言葉をいかに多用し、しかも戦後のある時期に集中的に頻用したことを調べ上げている。我が国の社会科学史の一面を特徴づけていると評価できる。この辺にも著者の「経済学探偵」の特質が表れている。この特質は東大現役時代の後期からのものである。

第3章は、2007年12月の「宇野弘蔵先生没後30周年記念研究集会」での発表の初めての活字化である。氏は風邪をおしての参加であったが、日ごろの馬場節が炸裂していたことを記憶している。こうしてあらためて活字になってみると、かなり重要な問題提起をされていたことが分かった。

この第1部の華である。宇野が理論体系を構想した時代と大きく世界は変貌したのに、宇野理論はその変化に対応しなかった。それでは宗教や教条主義になってしまう。そこで氏は「社会主義化展望の消失と獐猛で破壊的な資本主義国アメリカの基軸国化とによって世界史像は大きく変わった。世界史像に直接影響される発展段階論の構図は変わらざるを得ない。のみならず、上記2制約を解除した場合、原理論の構図も部分的には変わらざるを得ず、併せて原理論の根源的意義さえ、再考されねばならない」(21 ページ)として、「理論的改造試論」を提示している。まず段階論の改造から。これは以前から試みられているが、従来の宇野段階論を大段階と呼び、宇野が構想しなかったロシア革命以降を小段階論とし、(a)古典的帝国主義段階、(b)大衆資本主義段階、(c)グローバル資本主義段階として現在まで延長している。これは富裕社会化、過剰富裕現象の表面化、過剰富裕現象の全面化といった氏独自の理論を背景に持っている。この時代の基軸国アメリカを中心とした理論であり、宇野理論の現代化の一つのあり方と評価できる。これをどう精緻化するかという大きな課題が残されているが。原理論の改造について、氏は(1)純粋な資本主義像、(2)アメリカモデルの原論、(3)原理論の意義を挙げられている。(1)では「イギリス史に沿って労働力の商品化の進行を測定するのが、宇野の純粋資本主義導出方法である。労働人口中賃金稼得者比率は、メノコ算だが19世紀中葉で60%、これは20世紀末のアメリカよりやや低い。20世紀初頭までアメリカでは自営農民層の比率が高く、賃金稼得者が労働人口中最多になったことはなかった。しかし農民は農地を商品として扱い、投機対象にしていた。国際的に突出した株式会社普及度や金融の証券化を含めて、貨幣商品化の面でアメリカはイギリスを越える商品化の徹底を示していた」(24 ページ)からイギリスよりアメリカのほうが、純粋資本主義の歴史的根拠として有意義であると問題提起している。氏の出された英米比較であるが、時間軸が異なる比較で不十分ではなかろうか。この論拠の後のほうが、氏のとりわけ出したい論点であろうから、それに一元化したほうがすっきりするように見える。(2)あらゆるものが商品化されるのが資本主義であるからと言って、貨幣商品化という現象まで原理論に取り上げるというのは如何であろうか。この面がアメリカで徹底していることも一因としてアメリカを基にした原理論の構築を、というのであるがもう少し説明がほしいところである。氏は土地と資本の商品化をその形成・変動過程まで原理論に入れるべきで、そうしないとアメリカを基に原理論を構築する場合「歴史的現実との接点が失われる」(25 ページ)と主張されるのである。原理論の抽象基盤をどこに置くかの古くからある問題である。私は宇野のマルクス由来の抽象方法に与しているので、氏の立場をとらない。(3)原理論の意義について氏は、「経済学原理論は、単に資本主

義的再生産の描写に留まらず、経済発展のためなら資本主義制度がこの上なく有効であることを確認する方法である。原理論に登場するあらゆる機構が経済拡大のため、経済効率上昇のために作用する。但し、それが同時に社会を破壊し人類を危機に追い込む可能性を持つことも併せて明示すべきである。商品・貨幣・資本の流通諸形態は、人間に潜在する物的欲望の疎外態である。冒頭商品論に含まれる、簡単な価値形態以降の諸範疇は、欲望の拡大を動力として展開し、その極限が、貨幣量の無限の自己増殖に他ならぬ資本である。こうした疎外態の形作る経済機構に促迫されて、素因であった物的欲望は無限に膨張する。これが過剰富裕化を惹起する根因である(26ページ)と宇野の理論をさらに発展させている。そのポイントは2つ。宇野の自己増殖する価値の運動体という資本の定義を、究極まで考察すると資本自体の発展で資本の活動余地がなくなるという点まで考察したこと。それが同時に過剰富裕化を惹起する根因であると喝破したこと。これは従来見られなかった論点であり、正当なものである。

最後に宇野理論の効用がタイトルとして出され、「宇野体系は、上記の変更を施せば今日なお認識の手段として有効である。根本的には、原理論における、資本を自己増殖する価値の運動体とする把握。これが過剰富裕化の原因を言い当てている(27ページ)とさきの議論をまとめている。さらに氏は、「経済成長を止め、経済規模を収縮させることを通じて、大衆自身が潰かっている過剰富裕水準の消費生活を、意図的に切り下げねばならない。この実践的パラダイム転換の知恵を、あの世でマルクスと語っているであろう宇野から学ぶことは出来ないだろう。これが宇野理論究極の限界である(27~28ページ)とオチまでつけられている。馬場氏の面目躍如といった展開であり、付け加えるものは何もない。この後「付論 基軸国アメリカの特性把握のために」という短文ながら重要な指摘の多い文が付け加えられている。宇野学派には「アメリカ分析自体は少なくないが、視角をイギリス中心史観に引き寄せてしまうために、アメリカの独自性を掴みきれていない(28ページ)として、氏は「西欧資本主義が、先住民を殲滅駆逐した新大陸にヨリ獰猛で活力ある資本主義の分岐体を移植した。それがアメリカ資本主義の歴史的本質である(28ページ)と本書のテーマであるアメリカ資本主義の本質を摘出している。そしてアメリカ帝国主義の特性について宇野の理解を継承・発展させるためには、植民地時代に遡る必要があるとして、「狩猟・半農の生産力水準にあった先住民の地へ、農耕定着文明を経て近代化を始めたヨーロッパから移民が大衆的に押し寄せ、圧倒的な武力を利用して先住民を駆逐殲滅しその生活地を収奪し、近代共通の価値観である私有財産として分割した。…西欧資本主義の遺伝子を受け継ぎながら、新大陸特有の土地収奪によって近代性を

極端化した突然変異社会である」(29 ページ)と述べている。そしてアメリカ経済の特質として氏は、次のように述べている。①経済成長率が著しく高い。②有産者化は当初土地獲得で、投機を行って資本蓄積した。③産業構造は多軸的。④技術的特性は、労働節約的・資源多消費的大量生産。これらの要因によって、20 世紀的な経済社会システムが出来上がったと言える。最後に氏はアメリカ帝国主義の海外進出方法について「軍事力を背景に説得する。応じなければ武力行使する。それだけならかつてのイギリスの自由貿易帝国主義と大差ないが、アメリカは執拗で干渉性が強い。私利を普遍主義的言辞で隠蔽し、内部へ深く干渉する、自賛的な国家理念が強く、訴訟社会的訓練が行き届いているせいである。…同化できない相手は武力で殲滅する。…殲滅の記憶と宗教的自賛が重なるから、繰り返し不条理な非戦闘員殺戮を行なう」(34-35 ページ)と現代のアメリカ帝国主義の特質を見事に示している。このように見てくると先に述べたようにこの「付論」の意味は大きい。まさに宇野理論の歴史化のエッセンスが的確に表されている。

第 4 章は、最近発見された研究会記録『『経済政策論』について』の解説である。資料的に価値のある研究会記録であるが、宇野が「事実に関して豊かな知識を持ち、自ら唱えた理論的命題を保持しつつ、この豊かな知識によって各種の疑問に答え、しばしば予想外に柔軟な対応を示している。宇野が通常予想されるより遥かに高い実証性を持つことを示したものとして注目しておいて良い」(42 ページ)という判断を記憶にとどめておく必要がある。

第 5 章は、主として宇野の経済政策論の講義プリントの発掘についての記録である。宇野理論の歴史化を心掛けている氏の「新資料との遭遇」記録であり、その展開過程が面白い。

第 6 章は、宇野弘蔵と東畑精一という一見するとどのような関係と訝れるものが、実は熱い学問的交流があったことを示す発掘である。私は両者の編集になる『日本資本主義と農業』を持つてはいたが、ここまでの交流は知らなかったもので、大変興味深く読めた。また宇野のシュンペーター読書歴も興味をそそられた。

第 7 章は、矢内原忠雄の段階論と宇野の段階論との系譜関係の探索である。これは全く知らなかったもので、学史的な関心を深められた。ただ物証に欠けるところがあるので、段階論における矢内原の宇野への影響問題は、きわめて興味深い問題提起以上のものではない。今後の展開を待ちたい。

第 8 章は、「実証的宇野理論形成史」(492 ページ)で、宇野の『経済政策論』の成立を扱っている。宇野の経済政策論の「戦後初期の体系と著書『経済政策論』との異同」(87 ページ)、すなわち

『金融資本としての重工業』という単一形の総括的把握が、イギリスを海外投資として括り出し、その反射でアメリカをトラスト形成運動と掴んだことによって、『金融資本の諸相』とタイプ論に変わった」(107 ページ)の「がいつか」という問題である。氏は経済政策論形成史を丹念にたどり、結論(推測)として、「年次のないノート No.7 を昭和 25 年のノートと解して良ければ、その表紙には資本輸出がイギリス産業と両建てに記されているから、ここが転機になる。この講義以降、イギリス金融資本が海外投資として明白に括り出され、合わせて『金融資本の諸相』と命名された」(105 ページ)としている。なおこの章の末尾「むすびに代えて一大塚久雄の宇野批評」で、馬場氏は大塚の宇野批判が的外れであり、かなり捻じれた大塚の意識を明らかにしていることに注目したい。氏の言うようにこの大塚の宇野批判は、注目されていないから。

第2部 発展段階論とアメリカ

第2部は、第9章 ニューディールと「偉大な社会」、第10章 レーガン主義の文脈、第11章 アメリカ資本主義の投機性、第12章 現代世界経済の構図、第13章 世界大恐慌の再来?からなり、アメリカ論の中核であり、最も長大な部分である。

第9章は、東京大学社会科学研究所の『福祉国家』第3巻におさめられた論稿で、長大であるからそのポイントのみ摘記する。アメリカでの福祉国家形成をニューディールと「偉大な社会」という2大画期に焦点を絞っている。その前史で、自助主義という特徴をまず挙げている。「広大な領土を希薄な人口で急速に開拓した歴史が、自助主義を他の資本主義諸国のばあい以上に増幅した。増幅された自助主義は、経済、社会、さらに政治のいずれの面でも、多くの経路をつうじて、公的福祉政策の展開を制約した」(114 ページ)という結論を肉付けしていく。救貧の系譜では、原型、19世紀州への集中と抑制、連邦の登場あるいは不登場、革新主義の時代を取り上げ分析している。社会保険の系譜では、労災保険の「成立」、健康保険の欠落、老齢年金の渋滞、失業保険の思想を論じている。これを受けて「ニューディール」では、1935年社会保障法の成立、社会保障の定着、ニューディールの成果と限界を論じている。そしてこの限界を「偉大な社会」もしくは「貧困絶滅戦争」で一挙に果たそうとしたと述べている。「偉大な社会」では、漸進もしくは停滞、再改革の抑止因と起動因、偉大な社会の展開が論じられている。馬場氏は、ニューディールと対比して「ニューディールにおい

て資本主義という経済機構の存在理由が問われたとすれば、富裕化時代の改良においては、むしろ、アメリカという社会の歴史的文化的統合能力が問われたのである。そのことは…諸問題の多くが黒人問題と都市スラム化の問題にさまざまな程度でかかわり、しかもこの両者が密接にかかわっていることから知られるであろう。偉大な社会^{グレート ソサエティ}の課題は、特殊アメリカ的富裕化社会の産物なので」（156 ページ）と氏のいわゆる富裕化論を提起している。そして『偉大な社会』の過程が極端に錯綜したものになったのは、老齢問題と黒人問題との異質な二つの問題を、貧困問題として同時に処理せざるを得なかったからである」（197 ページ）と論じ、結論として「貧困戦争として出発した『偉大な社会』は、アメリカをかなりの程度福祉国家化したが、ヴェトナム戦争への介入をいちおう別としても、福祉国家化を徹底しえぬままに、そこからの反転をいずれはもたらす運命にあったといえよう。後発福祉国家アメリカの、福祉国家としての水位を一段階だけ一後退の危険を根本的には解消しないままに、ともかく一上げた。それが『偉大な社会』の歴史的貢献であった」（198 ページ）と論じている。

第 10 章は、同じく東京大学社会科学研究所の『転換期の福祉国家』上巻のために執筆されたものである。「レーガン主義の文脈」を「福祉政策の伸縮に現れる文脈を追おう」（212 ページ）として、まず「上からの革命と下からの反革命」で「本質的には、黒人問題は奴隷制の負の遺産であり、インディアン殺戮と並ぶアメリカ史の原罪であるが、一般の白人大衆はなかなかそのことに気付かない。むしろ気付きたくないのであろう」（214 ページ）と分析し、アメリカの社会政策は「上からの途」（215 ページ）でしか実施できないが、「こうした上からの革命を仕掛けられて、大衆はいわば心理的に傷ついた」（216 ページ）。それが「大衆的反動」（217 ページ）となって現われた。「こうした大衆の動向は、現状に対する不満とか反知性主義とかの点で、アメリカ史の伝統になぞらえればポピュリズムととらえられる」（219 ページ）。「バラ色の減税」では一時名をはせたラフファの理論について「万能薬を提供したのである。（中略）万能薬はしばしば麻薬である。それはバラ色の幻想を与えながら、常用すれば基礎体力を低下させる」（223 ページ）とその非現実性を明らかにしている。「成功した軍備拡大」では、「おそらく、レーガンの意図にいちばん近い成果を挙げた政策が、軍備拡大だった」（227 ページ）としたうえで、馬場氏は「民衆はヴェトナム敗戦の傷を、道義的反省による平和主義の徹底によってでなく、再び強いアメリカを築きソ連や小国に馬鹿にされなくなることで癒そうとしたのである。レーガンはこうした反転の先導者だった」（229 ページ）と的確に性格付けている。「裏切られた引締め主義」では、「レーガン本来の意図からいえば、財政引締めこそが政策の中心だった。それがほぼ完全に失敗し、逆の結果になった。これには彼の無知や幻想も与っていたが、本質的には、

潜在的に分裂した民意の反映であった。(中略)財政引締めに関しては、レーガンは負担者としての大衆の要求をほとんど裏切った」(239 ページ)というのが結論である。「恵まれた双子の赤字」では、「恒常的入超国化」(240 ページ)した結果である膨大な貿易赤字と「無規律の財政運営」(240 ページ)の結果である膨大な財政赤字について、「恵まれた双子の赤字」(246 ページ)とする。その根拠は、「受益者型の大衆が豊かな社会を望むのに応じれば、財政は赤字になるしかないし、不足分は国外から吸収するしかない。それがしばらく可能だったアメリカも、レーガン大統領も、まことに恵まれていたというしかない。だがそれが、基軸国としての信認を食いつぶしつつ、アメリカを最大の債務国と化し、他に基軸国が現れそうにない世界経済に、大きな不安要因を与えることになった。この不安要因がどう解消されるかはまだ予測しきれないが、すべてがアメリカの負担となるコースは考え難い」(245-6 ページ)とする。「強運なレームダック」では、「レーガンの強運は、復古的イメージによって人びとになぐさめとはげましを与えたところにあるが、それだけではない。世界的基軸国としての信認や、ニューディールや『偉大な社会』の成果といった歴史的遺産が、ことごとく彼に幸いしたのである」(249-250 ページ)と述べている。結論として(「むすび」)、馬場氏は「レーガン主義の功罪とは何だったのだろうか」(251 ページ)と自問し、「何よりもそれは、内外二つの戦争による傷を癒し、アメリカ人に自信を与え、社会を安定させた。だがそれは、理念や言辞やスタイルにおいて歴史の歯車を逆回転させることによってであり、それゆえに、現実と願望を合致させるより乖離させる、麻薬的效果を伴っていた」(251 ページ)と喝破している。これらの主張によってレーガン主義の文脈は明晰となった。

第 11 章は、東京大学社会科学研究所の『現代日本社会2』国際比較1に収められたものである。本章では、フロンティアというアメリカ特有の存在が土地投機を農民自身に行わせたことから土地にとどまらず特産物から果ては企業売買にまで及んだこと、それが肯定的に受け止められたことが指摘されている。また「金融資本成立過程の投機性」では、宇野経済政策論の評価に関連して「根本的には、ドイツ典型論の裏面としてアメリカに対する過小評価がある。量的に言えば、経済規模、一人当たり生産性、発展速度いずれをとっても、アメリカは同時代のドイツを凌いでいた。国際政治上の地位はまだ低かったにせよ、アメリカは生産力的基軸国となっていたのであり、この面を重視すれば、アメリカ金融資本を典型としてもよかったのである。株式会社制度の発達にしる独占的統合の水準にしる、アメリカはドイツを上回っていたと見てよい。にもかかわらず宇野は、アメリカについてはドイツ・イギリスほど発達していないものとして、歴史的地理的特殊性のゆえに明確な段階規定を与え

られないといい、トラスト運動として金融資本の形成過程のみをとり上げたのである」(270 ページ)と述べている。この宇野批判は、馬場氏の新たな帝国主義段階論の提唱であって、事態適合的である。ただ宇野のアメリカ論に見られるアメリカ帝国主義の証券投機性の明示という先駆性の評価を氏は忘れてはいない。「企業買収の四つの波」でアメリカの企業買収の歴史的展開過程を追い、最後に「アメリカ政府の認識」に及びその「ほとんど手放しに近い M&A 賛美」(279 ページ)を紹介している。

第 12 章は馬場氏主宰のブラウン研究会の研究書『現代世界経済の構図』(ミネルヴァ書房、2009 年)の序章である。「グローバル資本主義段階の意味」で、第 3 章の新段階論を再提示している。その際「新段階夫々の内容となる唯物史観的構図を大急ぎで述べておけば、生産力を代表する基軸産業が、鉄鋼業・大衆的耐久消費財産業・IT 産業、生産関係を代表する支配的資本形態が、金融資本・経営者資本主義・株価資本主義である」(292-3 ページ)としているが、このうち新しい規定である経営者資本主義、株価資本主義を持ち出す根拠の説明がほしい。全体的には金融資本であるが、その展開が古典的な金融資本ではないことの説明のために、新たに経営学や金融の実態から借用したと思われるが。大衆資本主義段階では、「市場として適合的なのは大衆的富裕化社会であり、量産効果を狙ってモデルチェンジ等大量販売方式が開発され経営史上の成功例とされたが、エネルギー大量消費や大量廃棄による環境破壊の原因となる」(295 ページ)と過剰富裕化社会の史上初めての登場を明らかにしている。「基軸国アメリカの特質」では「このアメリカの特性は戦後日本では見失われ勝ちになる。が、それではグローバリズムをせいぜい再版自由主義程度にしか捉え得ない。実はそれはアメリカによる世界侵略・同化過程であり、それだけに徹底的な他社会の破壊と地球環境破壊、延いては人類社会全体の絶滅を惹起する。アメリカの多面的侵略によって、おそらく人類はすでに不可逆の地点にまで達してしまったのである」(298 ページ)というアメリカの特質を原罪、成功強迫症、自賛史観、潜在的差別、階級性からなる「地理的歴史的特性」、高成長、産業特性、投機性、証券化、株式制度からなる「経済的特性」、自由貿易、自由貿易帝国主義、アメリカの論理、冷戦の抑制機能、宗教戦争、原罪の行方からなる「覇権の特性」に分けて分析している。この見出しからもある程度想像がつくように、氏の分析は多面的かつ大胆である。その結論は「それ自身環境破壊である戦争を含めて、アメリカが人類滅亡を導いていることは明白である。昨今多少問題にし始めたが、アメリカがこれを専ら国際主導権の道具として扱うだけで、自国の経済や生活に影響する実質的排出削減など全く考えていないことは明らかである。償われなかった原罪とはこのことで

ある。近代主義自体を払拭しきれなかったマルクスは、結局そこまでは見通し得なかったのではないか(312 ページ)。見事な基軸国アメリカ論であり、マルクスの限界の指摘である。最後の「分析課題」では、「グローバル資本主義段階にある世界経済分析の課題」(312 ページ)を3点とり上げている。まず「構造的特質」をとり上げ、高成長の持続、人口の加速度的増大、人口を支える穀物生産の増加、石油依存型工業文明、「経済成長自体が社会の目的になった」(315 ページ)経済体制を分析している。次の「助走期間」ではソ連崩壊の前20年間をとり上げ、アメリカ史の屈折(アメリカ発の自由主義的反動が世界史を主導)、段階的推転(大衆資本主義段階からのグローバル資本主義段階への推転)を歴史的に明らかにしている。そして「資本蓄積」では株価資本主義、グローバル化の効用、対米集中、ドルの信託をとり上げている。グローバル資本主義における資本蓄積の結論は「蓄積主体は株価資本主義と呼ばれる、短期間最大限利潤を追求する資本である。それがIT化を伴うグローバル化によって蓄積基盤を世界大に拡げ、一般的蓄積に加えて本源的蓄積をも遂行している。その結果、資本が獲得する剰余価値が増大し、その反映として、蓄積の原因でも誘引でもある利潤率が高目に維持される。それは既成の資本主義国たる先進諸国に流入し、特に基軸国アメリカでは経済の需要過大性を維持しつつ、擬制価格として発現して株高を齎す。主体はこれによって維持される」(322 ページ)ということである。さらに章末に「補論 中国経済について若干」が付されている。

第13章は、「2008年恐慌」に触発された時論且つ理論である。恐慌理論については基本的にはそれで足りる宇野恐慌論があるが、「資本蓄積過程の一環としての土地市場や株式市場の動態は説かれていない」(344 ページ)し、段階論でも叙述が第1次世界大戦で打ち切られているため「資本主義の世界史がイギリス中心的に捉えられて」(345 ページ)おり、アメリカの過小評価である。世界資本主義の20世紀での展開を見れば、「アメリカモデルへの切り替え」が必須であるとする。「世界大恐慌の条件」に移り、その条件として「金余りと資本輸出化」(347 ページ)、その結果としての「国内の資産投機」、とりわけ株価騰貴、さらに「自己資金の必要額を減らす証拠金取り引きの横行」(348 ページ)となり、最終的に空前の好景気からの転落となったと見ている。世界大恐慌と現在の「恐慌」の「異同」では、「二つの不況の間の共通性はかなり大きい。第一に、世界経済の基軸は、共に証券投機資本主義国アメリカである。第二に、共にアメリカで金余りを生じている。(中略)第三に、かつては国際的地位の上昇がブームを支える心理的要因になったのに対して、今回は冷戦勝利感と安堵感がより強く作用した。アメリカ人大衆の自己確信が強まり、彼らの生活信条である市場主義

や投機選好が強化されたが、それは当然株価押し上げの一因となったであろう」(349-50 ページ)としている。その違いは、「何よりも、今回はかつてほど投機がウォール街の株価暴騰に収斂しなかった。(中略)今回は投機の発現が多方面に拡散していた。そして、それぞれの破綻は小さからぬ衝撃を起こしたものの、衝撃は局所的に吸収されて金融機構の中枢には及ばず、世界的な資本蓄積機構を動揺させることはなかった」(350-351ページ)ということである。「崩壊の可能性」では、今次の「恐慌」からの崩壊を予測することの困難を様々な要因を挙げて分析している。「大恐慌の世界史的意義」では、大内力と加藤栄一の大恐慌の位置づけの違いをアメリカ中心にみるかヨーロッパ中心にみるかであるとし、馬場氏はその後の経済発展史からアメリカ中心史観を取り、大恐慌を画期とみている。この節には現代アメリカに対する鋭い批判が多々見られるが、割愛せざるを得ない。「恐慌の人類史的意義」では、「今次の恐慌が人類史的意義を持つには二つの条件が必要である。一つは、隠蔽され累積した不良資産が大方の予想どおり大きく、それが露呈し続けて不況が世界大恐慌時に匹敵することである。もしそこまで行けば、基軸国アメリカで大衆の窮乏化が社会的危機を齎すであろうし、(中略)同時にアメリカの国際的権威は急落し、世界中のアメリカ崇拜は沈静する。さて、そうなった時に、人々が物的窮乏に耐えて安定社会を維持し得るほどに賢明であり得るか。それがもう一つの条件である。肝心なことは人々が経済成長志向から脱却することである。そして 1970 年代以降の先進国の消費水準が過剰富裕状態であると確認することが、これと対になる」(359 ページ)と基本的視角を提示している。そして過剰富裕状態とそれによる人類存続の危機の説明の後、「今、逆転の機会が一つだけ出てきた。それが、2008 年恐慌が 1929 年大恐慌並みに深化し、その時同様、過剰富裕状態が前過剰富裕水準にまでに低下することである。(中略)そしてそこから、社会が経済成長でなく分配による安定の道を選ぶようになれば、そこで人類存続の可能性が出て来る。商品経済の下、物的欲望は充足されるとさらに膨張する。資本とはこの欲望の疎外態に他ならない。不況下の窮乏によって欲望が萎縮するのは天恵である。そこから再出発して人類存続の途を見出し得るか否かは、人類がどこまで自らについて哲学し得るかにかかっている。そこで、もし哲学が十分に行われるようであれば、2008 年恐慌はまさに人類史的画期だったと言えることになる」(361 ページ)と文明論的なかつ印象的な主張で締めくくっている。このスケールの大きな馬場氏の持論の主張を人類がどう考えるかに、人類存続の鍵があるといえよう。

第3部 経済学史断片

第3部は、第14章 ホモ・エコノミクスの探索、第15章 スチュアートの国際経済論、第16章 シンポジウム報告—バーシェイ『近代日本の社会科学』を巡って 第17章 再論 “資本主義” からなる。

第14章は、Homo economicus、Entrepreneur の語源探索、それにペティ説の継承者達の継承の仕方(正当に継承している者と捻じれた感情のもとに師とかかわっている者)を明らかにしている。総じて経済学探偵物語といった感じのもので、文を追っていくうちに通説と異なる展開を見ることになる。

第15章は、「スチュアート『経済の原理』の中に、今日なお有益な国際経済論が含まれていたことを指摘し、併せて、それが後続の代表的な経済学者によってなお十分に活用されなかった経緯を示」(407 ページ)すことを狙いとしている。まずスチュアートの理論的貢献として、貿易収支と国際収支の違い、国際貸借論、世界貨幣論を挙げ、スチュアートの後続者としてスミス、リカード、マルクスを挙げ、その継承・不継承関係を明らかにしている。最後に氏の元々の関心であった岩田世界資本主義論について「宇野理論体系を踏まえて成立したが、鈴木鴻一郎の便乗と教条主義的宇野学派の反発とによって歪んだ歴史をたどった。(中略)だが、岩田氏が、リカードの比較生産費説を用いて、貿易の内面化が作用しそれが剰余価値率の上昇を齎すと指摘したことは、国際経済論領域に積極的な発言のなかった宇野体系を大きく補強するものであったし、併せて、世界貨幣論の掘り下げによって、最好況期の対外金流失が恐慌の発端になると指摘したことも、スチュアートに由来する貨幣論の利用として大きな補強であったと言えよう」(411 ページ)と高く評価している。

第16章は、表題からわかるようにアメリカの研究者バーシェイの『近代日本の社会科学』をめぐるシンポジウムでの馬場氏の発言である。「バーシェイの日本語力」では、難解を持ってなる山田盛太郎、宇野弘蔵の日本語を外国人として難なくこなしているバーシェイの日本語力を激賞している。そして馬場氏の文体を的確に特徴づけたことにも。また馬場氏の理論を正確に認識していることにも。「日本資本主義論争の知識社会学」では、論争参加者の特徴づけを「出自と外遊体験の有無の二つの事情が強く作用していたものと解釈できる」(425 ページ)と初めて聞く議論をしている。また宇野理論体系について氏は、「西欧近代社会の基底にある商品経済的—資本主義的行動様式の解明を踏まえていたから、近代社会そのものを理想化しなかった。高度経済成長の中で、宇野体系によ

る『日本資本主義の後進性』に基づく説明力が低下したことはバーシェイ氏が指摘するとおりだが、宇野体系は、根底にもっと普遍的な近代批判の武器を備えていたのである。もっともそれは、後継者達でさえ簡単には自覚し難いものであったが(427 ページ)と深い指摘をされている。「山田盛太郎の講義ぶり」では、今となつては伝説的な人物の講義を実体験した人ならではの貴重な報告をしており、興味深い。

第17章は「資本主義」という言葉についての再論である。資本主義という言葉がフランス、イギリス、ドイツ、ロシアでどう生まれてきたかを先学の業績を踏まえた探訪記である。新知見もある。簡潔であるが、ヴェーバー批判も面白い。

第4部 過剰富裕化論の徹底

第4部は、第18章 経済成長論再考、第19章 資本主義の自滅—過剰富裕化のツケからなる。第18章は、経済成長という用語史の要約から始め、「イデオロギーとしての経済成長」、「成長の限界」、「日本について若干」、「付論 重税国家のすすめ」からなる。「イデオロギーとしての経済成長」では『『経済成長』は経済現象の実態を反映する経済学的側面と、それを包む政治的イデオロギーの側面との双方を含意する(455 ページ)として、この両面を明らかにしている。前者については、資本の定義の再確認をしてから、「欲望と消費は相互循環的に拡大する。何も資本家的消費には限らない。労働者階級の賃銀稼得といわゆる生活水準の間にも、全く同様な相互循環的拡大が生じる。だから資本蓄積が、歴史貫通的な成長イデオロギーの根拠たり得るのである(456 ページ)と。そして先進各国への導入史の後、この用語は「戦後資本主義にとって全体的な合意となった。(中略)各種社会層も、成長に伴って直接に利を得るか、増分主義的施策に均霑する。こうして資本の本質的欲求たる無限の蓄積衝動は、個別資本の直接的な拡大衝動として表現され続けたばかりか、(中略)各種社会問題解消の万能薬として、各国政府、財界労働界、各種社会集団全てに支持され志向されるイデオロギーとなった(458 ページ)と「イデオロギーとしての経済成長」を明らかにしている。この分析は初出ではなかろうか。鋭い特徴づけである。「成長の限界」では、「資本主義の過剰成長が資本主義諸国に大衆的過剰富裕状態を齎し、それが地球環境に壊滅的破壊を齎したばかりか、社会と人類の内的劣化を引き起こすことで破壊抑制の意思と手段を失わせ、併せて種とし

ての人類自体の存続を危機に追い込んでいる。種としての人類が消滅すれば、人類存続を前提とする資本主義社会も当然に消滅する。これは資本主義の自己消滅過程に他ならない」(458-9 ページ)と持論を展開している。さらに馬場氏は、『『経済成長』を国是としてから半世紀。現代の人類は、一千万年近い人類史を、自らの欲望による環境破壊の結果として、自ら閉じようとしている。安楽と富裕追求のために、『経済成長』を追求し加速し続けた、気づかざる結果である。目前の奢侈的消費を維持するために、子孫の存続基盤を奪った。もはや引き返す途はない。罪なるかな経済成長、である」(466 ページ)と絶望的な結論を示している。そのうえで人類滅亡に手を貸したことになる「禍なるかな経済学者諸君」に「理論とイデオロギーを区別せよ、理論の役割は底に隠された真実を発見することにある」(466 ページ)と呼びかけている。「日本について若干」では、これまで見た経済成長観を日本に適用し、「経済成長の持続は人類史的に有害な道徳的悪であるばかりか、日本にとっては、不可能を望む妄想である。社会の安定的維持のためには、何よりも、成長イデオロギーを洗い落とすことが必要なのである」(468 ページ)と結論を述べている。「付論 重税国家のすすめ」という短文では、今必要な政策は租税国家意識を高めるために、重税国家化すべきであるというものがある。経済成長を国是にするのではなく、環境回復を国是にすべきであるとしている。

第 19 章は、経済理論学会での報告の初めての活字化である。元になった学会報告を評者も聞いているが、こうして活字になるとやはり有り難い。「題意」、「過剰富裕の意味」、「本論」、「付論」からなる。「題意」ではタイトルの意味を「通常批判を免れる、資本主義の順調な経済発展や技術革新やグローバル化が、その裏面で過剰富裕の世界化をもたらし、それが近代文明の崩壊を伴う人類の絶滅を惹起することを通じて資本主義自体の消滅を導く」(474 ページ)ことであるとする。次の「過剰富裕の意味」は、すでに多くのところで説明されているので省略する。ただそこでアメリカの貧民のほうに肥っていることが、「過剰富裕化が一層進行して貧民層にまで及んだ」(475 ページ)と述べられているが、これは廉価なファストフードの大量摂取のなせる業であって、貧困なるが故ではなかろうか、疑問が残る。「本論」では、新しい主張をされている。資本主義の 21 世紀での消滅の経路の展開である。「1 極めてありそうな、必然の経路」は、「金儲け＝資本蓄積に則った、世界規模での経済拡大の持続→過剰富裕化の昂進→自然環境・社会・種としての人間の、徹底的破壊→近代文明の崩壊と人類の滅亡→担い手の消滅による資本主義の消滅」(477 ページ)である。「2 これよりは望ましいが、実現不可能な経路」は、「人類による危機の自覚→資本主義の抑制→生活水準の引下げと戦争放棄→社会・産業・経済機構の大変革→収縮経済の定着と連带的社会制度の世界化

→世界社会主義化→資本主義からの根本的離脱→人類存続の可能性」(477 ページ)である。あとの経路は、人類が当面の生活水準を後世の人間のために引き下げるほど理性的でないから問題にならないと切り捨てている。したがって人類存続の可能性は、なくなる。初めに挙げられた経路は、「思想史の出発点」、「原理的根拠」、「歴史的根拠」から裏付けられている。そして「付論」で「環境破壊の現在」、「人類そのものの劣化」を論じ、最後に「以上の考察から、資本主義が、万能薬としての経済成長を通じて世界規模の過剰富裕化を惹起し、その結果、人類の滅亡を通じて自滅するのが殆ど必然だと言える」(486 ページ)という結論で本書は終わっている。絶望的な結末である。

読み終えて

500 ページとなる大著をようやくにして読み終えた。昨年の 2 月から大病と闘っている喜寿を過ぎた碩学の警世の書であるとともに、著者畢生の大著である。処女作『アメリカ農業問題の発生』での「生産工程の機械化・電化は肉体労働量を減じ、社会構成上もブルーカラー層に比しホワイトカラー層を増し、さらに自動車の普及による交通通勤労働の軽減と相まって、熱摂取量を減じつつビタミン等への要求を強める。自動車の普及、家庭電化、中央暖房装置の一般化等は薄着の習慣を作り出す、といった次第である」(230-231 ページ)という萌芽的な過剰富裕化の指摘が、42 年後にこのように全面的に開花したのである。大変長期にわたる思索の結果である。最近出された氏の本で、過剰富裕化論については、部のタイトルが「過剰富裕論の展開」(『マルクス経済学の生き方』2003 年)、「過剰富裕論の深化」(『もう一つの経済学』2005 年)から本書の「過剰富裕化論の徹底」へと理論の進展とともに変化してきていることも重要である。ここで過剰富裕化論は徹底され、その理論の極致に至ったとみてよい。また氏の経済学者への呼びかけは悲痛であった。経済学者は一部の人を除けば、馬場氏の提唱、理論には全く反応を示さないが、環境倫理学では、過剰富裕化論と全く交渉、交流もなく馬場氏とかなり似た議論をしている(戸塚茂雄『過剰富裕化と過剰労働時間 第 2 版』開成出版、2009 年)。こういった議論についてないものねだりであるが、馬場氏の意見を聞きたかった。

本書の最大のテーマは、宇野経済政策論、段階論の組み換えである。宇野のように第 1 次世界大戦で発展段階論を打ち切ることは出来ないという馬場氏の説は説得力があった。ただ経済学原

理論をアメリカをベースに組み替えるという点については、いまだイメージがわいてこない。私の宇野教条主義のなせる技なのかもしれないし、アメリカ理解がないからかもしれないが。もう少し考察してみたい課題を与えられたと考えたい。

ともかく馬場氏の議論は馬場経済学から馬場理論へと変貌を遂げたといつてよい。宇野弘蔵と同じ地平に立ち、宇野の時代的制約を超えているところに馬場氏の真骨頂がある。師の理論を拳拳服膺しないところに、宇野弘蔵の経済学が宇野理論を併せ持つように、氏の師大内力を否定的媒介にしてさらに飛躍したとみてよい。大内力の場合、厳密な理論体系を構築したが、思想を感じることは出来ない。馬場氏の場合、過剰富裕化論をはじめ文明論、文明批評・批判にまで及んでいる。単なる体制批判ではない。思想の香りがする。思想家でもあるというのは、宇野学派では稀有な存在である。また馬場氏の学問はその射程が長くかつ深いこともその特色といえる。宇野理論の歴史化と現代化に成功していると言える。また田中真晴が中野正を評した『『資本論』と宇野理論だけが思考の枠組であり、その他の教養のない多くの宇野系経済学者の狭さと異なるものであった』(田中真晴『経済学史家の回想』未来社、2001年、87ページ)という言が、本書の著者馬場氏にそのまま当てはまると言えよう。

このような多様な領域にわたる壮大な理論体系、重厚かつ大胆な分析をした書に対してマスコミは沈黙、ミニコミというべき学界は一部を除いて無視(中山弘正氏、瀬戸岡紘氏の書評が例外中の例外。後者は執筆時未刊)、これらの中間である媒体の書評新聞も沈黙。これは論壇の衰退・劣化であろう。馬場氏の過剰富裕化論は原発批判を含んでおり、というより原発は過剰富裕化の結果でもあるから、3・11以降一層顧みなければならなくなったからである。

なお索引に宇野弘蔵、宇野理論が拾われていないのは煩瑣であるからであろうか。気になったところである。

現代の人類にとって喫緊の課題である過剰富裕化からの脱出について、馬場氏の今まで刊行した書物は多くの国民が手にするには大きすぎる。ハンディな本の刊行が待たれる。熱心な一部の読者の独占物にしておくのは惜しいからである。

なお独創的な在野の学者神長倉真民を発掘された一連の馬場氏のお仕事がいまだ刊行されていないことは、大変残念であるし、日本の社会科学にとっても勿体無いことである。一日も早い刊行を望んでいる。

最後に私事にわたるが、本書の「はしがき」で私にご依頼したインタビュー「社会科学を語る(続)」

(青森大学・青森短期大学『研究紀要』第 33 巻第 1 号、2010 年 7 月)が本書出版の一つの機縁となったと書かれており、これには大変恐縮している。

[付記] この書評を書くにあたって著者の馬場氏には、先行の書評を書かれた中山弘正氏の書評(『PRIME』第 34 号、2011 年 10 月、明治学院大学国際平和研究所)を見せていただいたり、文献についての照会についてご教示を得たりした。馬場氏及び中山氏に感謝の念を記しておきたい。

なお本稿脱稿後馬場宏二先生は 22 か月に及ぶ治療の甲斐なく 10 月 14 日逝去された。生前の深い学恩に感謝し、ここに哀悼の念を表し、お別れの言葉としたい(2011 年 10 月 15 日)。

[WEB 版付記] 『研究紀要』第 34 巻第 2 号(青森大学、2011 年 11 月)所収の本稿を 2 か所誤植訂正したものである。内容上の変更はしていない。